

名取市東日本大震災復興記録誌
2011-2025

第Ⅱ部

名取市、復興の原動力

【インタビュー】市民発の復興論

P.384

第Ⅱ部

名取市、復興の原動力

垣根を越えて未来を創る

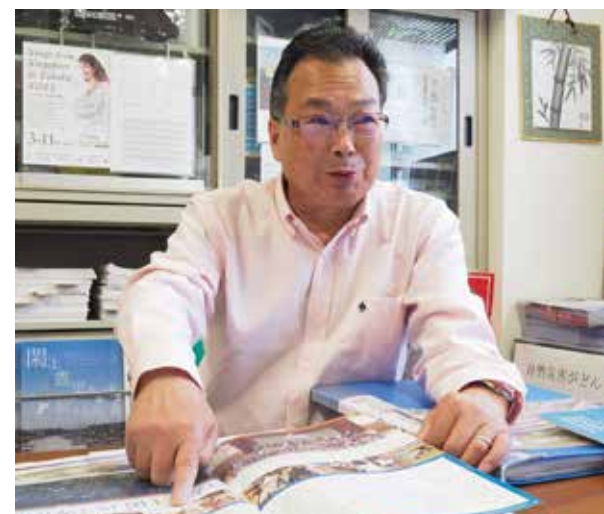
市民発の復興論

東日本大震災からの復興過程において
重要な役割を果たしてきた「市民」「協働」「中間支援」。

名取市においても行政の垣根を越えて民間からの支援や市民参加のまちづくりが立ち上がった。

絶望から希望へと虹色の架け橋をつないできた民間・市民参加による復興まちづくり。

復興への想いを自らの言葉で語るストーリー。



INTERVIEW

1

一般社団法人ふらむ名取 代表理事

格井 直光さん

かくい・なおみつ 昭和33(1958)年生まれ。東北学院大学卒業。会社員を経て平成23(2011)年10月から『関上復興だより』編集長、翌3月から「関上震災を伝える会」代表。平成29(2017)年4月に一般社団法人ふらむ名取を設立、代表理事となる。

東

日本大震災では関上三丁目の自宅が流され、両親が犠牲となりました。その年の10月にふるさとの現況を伝える新聞『関上復興だより』を創刊。編集長として60号まで出した後、令和2(2020)年から題名を『関上だより』と変えて年4回無料配布しています。

創刊のきっかけは福岡県玄界島の広報紙『玄界島復興だより』を目にしたことでした。玄界島は震災の6年前に起きた福岡県西方沖地震で被災し、3年で復興したといえます。私が「こんなのがあったらいいな」とつぶやいた一言に、関上の復興支援に入っていたNPO法人ロシナンテスの理事長が「やってみたら」と即反応し、制作費を負担してくださいました。

実はその頃、みなし仮設住宅へ入居し地元の人たちとの情報が途絶え、みんな何処にいるのだろうと、私のなかでコミュニティ崩壊の危機感や疑問が高まっていました。離れ離れになった町内の知人に連絡したくても公的機関は連絡先を教えてくれず、地域の復興計画の進捗に住民が触れる機会もほぼなかったのです。

そこで創刊号には住民の近況や復興芋煮会で住民が再会をした様子や、市の復興計画や関上に寄せる想いなどを掲載しました。広報の経験などなくて手探りでしたが、B4判1枚のささやかな新聞はみなさんにとても喜ばれ、1,500部がすぐなくなりました。市役所前広場で行った復興芋煮会も仮設住宅から大勢シャトルバスで駆けつけてくれて大盛況。嬉しい反響に応えようと次号から広告を集めて経済的に自立し、ページも増やしました。そして現地再建が進み次の段階に入ったと感じた頃、タイトルから〈復興〉の2文字を取ってより広く深い情報を発信しています。

「ふらむ名取」はコミュニティ再生の支援や前身の「関上復興だより・関上震災を伝える会」時代からの語り部活動にも取り組んでいます。芋煮会や年末年始のもちつき大会といった定例行事、災害公営住宅での茶話会は、楽しみにしている方がたくさんいます。これらは、復興途上でお互いの感情がもつれても、何かに一緒に取り組むことで気持ちが丸くなって共に前に進もうという雰囲気生まれるのではという思いから始めたことです。また、震災前後の風景を記録した写真集の発行も大きな仕事です。

「ふらむ」はノルウェー語で「前進」を意味します。19世紀末の北極海で氷に閉じ込められながらも脱出した探検船「フラム号」のように、未来に進むのだという希望を込めました。これからも生まれ育った地の文化や歴史を次の世代に伝えていきます。



『関上復興だより』から見る未来

第Ⅱ部

名取市、復興の原動力

市民発の復興論

コミュニティ形成の難しさを実感

増加していますが、震災時に子育てをしていた中間層が転出したまま戻ってこず、世代が抜けた状態のため世代間の交流がなかなかうまくいきません。町内会を立ち上げコミュニティ形成の糸口が見えてきたところで、今度は新型コロナウイルス感染拡大により数年間にわたって地域交流が制限されてしまいました。その間にもどんどん若い人たちが閑上に移り住んでいます。一見、順調に復興しているかに思える閑上のまちですが、住民間の親睦がなかなか深められないのが実情です。

なぜコミュニティを作るのか。1つには有事の際にみんなで助け合うためという理由が挙げられると思います。世帯数が増えたから町内会を作って近所同士で助け合いましょうと口で言うのは簡単です。そこで本当に助け合える関係性を築くには、長い年月をかけなければなりません。今は、しっかり機能するコミュニティを作るための種まきの時期。地域みんなが顔を合わせ、言葉を交わし、お互いを知り距離を近づけていけるような場を作るため、町内会として試行錯誤をしています。

INTERVIEW
4

閑上西町内会・会長

渡邊 成一さん

ンスホールを借りて風通しのいい半屋外で開催する夏祭り、クリスマスにサンタクロースのコスチュームを着た子どもたちがプレゼントを配りながら地区内を練り歩く「子どもサンタパレード」などを開催しました。名取市全域が通学区になっている閑上小中学校には子ども会がないため、こういった行事は子どもたちの貴重な活動の場になっていますし、また保護者同士の横のつながりを作る機会になっていると思います。

子どもと子どもの親世代、高齢者とそれぞれに交流の場がありますが、残念ながら世代間のつながりはまだ希薄です。コミュニティ形成には時間がかかります。世代間がつながりを持ちつつ若い世代を主体とした町内会づくりができるよう、今はその下地づくりの期間と捉え活動しています。

INTERVIEW
3

閑上中央町内会・会長

長沼 俊幸さん

平成31(2019)年から閑上中央町内会の初代会長を務めています。新しいまちで新しいコミュニティの形成に努めてきましたが、非常に苦労しています。

震災後、被災者は避難所から仮設住宅に移りました。仮設住宅は同じ地区の人たちでまとまるのが基本ですが、子どもがいる家庭は通学に便利な学校近くの仮設住宅に入居したため、子育て世帯とそれ以外とで地域コミュニティが分かれてしまいました。その後もまちづくり計画は遅々として進まず、時間ばかりが過ぎるなかで閑上に戻ることを諦める人が続出、多くの子育て世帯が子どもが落ち着いて勉強できる環境を求めてよそに転出してしまいました。

ようやくできた新しい閑上のまちは若い子育て世代に人気があり、他地域から多く転入してきています。もともと閑上に暮らしていた高齢者と合わせて閑上の人口は

新しい閑上のまちには、ほかの地域から若い子育て世帯が多く移り住んできています。閑上小中学校や保育園がある閑上西地区は特に子どもの人数が多く、高齢者が占める割合は十数%なのに対し、15歳未満の割合は25%を上回ります。年代構成のバランスが良く、5年後、10年後と先を見越したときに持続可能な地域といえるのではないのでしょうか。

令和2(2020)年に世帯数の増加に伴い閑上西町内会を立ち上げました。当初は閑上にもともと住んでいた人たちが中心となって組織されましたが、新しく流入してきた若い世代にいかはこの土地になじんでもらうか、どうすれば地域活動に参加してもらえるか、既にできあがっている高齢者コミュニティとほかの世代の人たちとの隔たりをどう解消するかが課題でした。

世代も考え方も異なる人たちがベクトルを合わせて何かを一緒に行おうとするのは、とても難しいことです。みんなを結びつけるための鍵となったのが、子どもたちの存在でした。コロナ禍の時期で行動に制限がありましたが、まずは子どもたち向けの行事を企画しました。閑上小中学校のエントラ

子どもを軸にコミュニティを形成

「いのち」を語りつぎ、伝える

第3日曜日13時から「語り部の会」を開催しています。誰でも自由に語ることができる時間です。震災の経験の有無は問いません。言葉にしたい想いをお持ちの方、是非語ってみませんか？ 聞き手、語り手どちらも募集しています。

震災学習プログラムの「閑上案内ガイド」「語り部講話」では、いのちの大切さを他人事ではなく自分ごととして考えてもらうための時間に。また、現地に来ることが難しい方のために「オンライン語り部」や「出張語り部」なども用意しています。

なぜ語るのか？ それは「歴史は必ず繰り返すから」。きっとまた同じことは起きてしまう。無かったことにせず教訓から学ぶ。それがきっと未来の誰かのいのちを救うことにつながると信じています。次の世代に伝えること。これが私の使命だと今は考えています。

毎年3月11日には「追悼のつどい」を開催しています。高い高い空の上にいる大切な人へメッセージを届けたい、という思いから始まった「追悼のつどい」。はとの形のエコ風船に直接メッセージを記入して天に届ける。私たちの慰霊の形です。

私が一番最初に書いたメッセージは、「お母さんの子どもに生まれてくれて ありがとう 助けてあげられなくてごめんね」。今は「たまには帰っておいで」。こんな言葉を届けています。3月11日に閑上に来ることは難しいけれどメッセージを届けたい方へ、ご自宅でメッセージを記入してもらい、当日は私たちが天に届ける「はと風船の出張」も行っています。参加者は年々増え、同じ時間を共有できることがとても嬉しいです。この先も可能な限り続けてゆきたいと思っています。ご参加いただくと幸いです。

震災から15年経ち景色は大きく変わりました。私も嵩上げた閑上地区で暮らしながら息子が教えてくれた「生きていることは当たり前ではない この世で1番大切なものは いのち」。このことをこれからも言葉に重ねてゆきます。



INTERVIEW

津波復興祈念資料館 閑上の記憶 代表

2 丹野 祐子さん

たんの・ゆうこ 昭和43(1968)年仙台市生まれ。名取市閑上地区在住。東日本大震災で義両親と息子を亡くした経験から、2012年閑上中学校遺族会慰霊碑を建立、津波復興祈念資料館「閑上の記憶」を開所。訪問者向けに語り部活動を始め、現在は同施設代表をつとめる。

東 日本大震災では旧閑上中学校の生徒14人が犠牲となってしまいました。その中に当時13歳中学1年生だった私の息子が含まれています。

自宅が流されてしまい我が子の写真もビデオも母子手帳もへその緒も全てを無くしてしまった私は、我が子の生きた証を残したいと思うようになりました。閑上中学校遺族会を立ち上げ、亡くなった14人の子どもの名前を刻んだ慰霊碑を建立しました(現在は教育委員会の計らいで閑上小中学校の一角、閑上プラザ内に置かせていただいております)。それがきっかけとなり、現在の津波復興祈念資料館「閑上の記憶」が生まれました。

あの日この町で何があったのか？ 自分の目で見たもの、自分の耳で聞いたことを言葉にしてきました。語ることで自分の心に折り合いをつけ、生きてゆくことを許されたような気がしています。「閑上の記憶」では月に2回、第1、



みんなが集う場を増やし、絆を育む

被害を受けたため営農も再開できません。家にいても手持ち無沙汰で、どうしても気分が沈みがちになります。震災後に町内会長に就任した私は、「なじみの顔でおしゃべりできれば、少しは気分も晴れるだろう」と考え、集まれる機会を意識的に増やしました。会合や宴会を頻繁に企画しては全世帯に知らせを出したところ、もともと結束の強い地区だったこともあり、皆さんすぐに集まってくれました。他地区へ引越した方々も、その都度足を運んでくれたのは本当にうれしかったですね。顔を合わせて笑い合うことで、さらに親交が深まったと感じます。震災直後の農地の瓦礫撤去作業や、名取市サポートセンター「どっと・なとり」による月1回のお茶会も、皆が集う貴重な機会となりました。

農家には古くから互助の精神が根付き、強い絆で結ばれています。その気質こそが、小塚原北町内会の仲の良さの源泉でしょう。町内会の戸数は震災前の62戸から42戸に減少しました。しかし、今日まで頑張ってこられたのは、近所の仲間がいたから、そしてその絆が途切れなかったからだと確信しています。

INTERVIEW
7

小塚原北町内会・会長

引地 誠一さん

発 災時、私は自宅にいました。津波避難が呼びかけられたため、近所に住む障がいをお持ちの方が介護施設のスタッフと避難するのを見届けてから、家族とともに車で愛島方面へ向かいました。揺れが落ち着いた頃に自宅の様子を見に戻ると、辺りには漁船が打ち上げられ、倒壊した住宅の木材などの「瓦礫」が散乱し、足の踏み場もない状態でした。新築して2年のわが家は、建物の形こそ残っていたものの、床上約1.6mの浸水により壁は大きく破損。農機具などを入れていた納屋は跡形もなく流されていました。

小塚原北町内会の人たちは、仮設住宅やみなし仮設への入居、浸水しなかった自宅2階での生活、あるいは現地再建を諦めての転出など、生活の場がばらばらになってしまいました。町内会の多くが農家です。田畑が甚大な

東 日本大震災発生時、私は名取市増田で開かれていた会合に出席していました。自宅の様子が気になり帰宅しましたが、私の家も杉ヶ袋南地区もさほど被害は見られませんでした。妻とともに名取市内に住む孫や親族の家を回り無事を確認して自宅へ戻ろうとしたときに前方から津波が押し寄せてくるのが見え、急ぎ西に向かって車を走らせて何とか逃げることができました。幼い頃から仙台湾の中にある杉ヶ袋には津波は来ない

と聞かされてきました。そのため地震直後に仙台空港に6mの津波が来ると聞いてもピンと来ず、自宅に戻ろうとしてしまったんです。町内会でも津波を想定した避難訓練をしたことはありませんでした。実際には地区全体が浸水し、特に被害の大きかった八間堀の東側は災害危険区域となりました。

もともと杉ヶ袋南地区の住人のほとんどが農家で、いわゆる実行組合や出荷組合などの顔触れと町内会の顔触れがほぼ同じ、仕事でのつながりがそのまま町内会のつながりにもなっていました。仕事で協力し合うだけでなく何かにつけて寄り合い、農閑期にはみんなで旅行をするなど日頃からの密な付

町内会の絆の強さが復興の鍵に

防災安全の確保が地区の課題

INTERVIEW
5

美田園北町内会・前会長

高橋 学さん

定し、北釜地区防災集団移転協議会(後の下増田防災集団移転協議会)を設立しました。

平成24(2012)年9月には移転先が美田園北に決定。新しいまちづくりにおいて何より優先したのは、住民の安全と安心です。土地の嵩上げ、地耐力を高めること、幹線道路との間に緑道を設けて景観を整備すること、これらを町内会の声として市に要望しました。協議会の名称を町内会設立準備協議会に変更し、下増田地区以外から移転してくる方々とともにまちづくりを推進、平成27(2015)年10月に無事「美田園北まちびらき」を迎えることができました。

住民間の意見調整や行政とのやり取りに苦心したこともありましたが、積極的に声を上げて行政に働きかけたことで、結果的に利便性の高い場所での安心・安全な暮らしを手に入れることができたと感じています。

す。農業は1人で継続できるものではなく、周囲との協力が欠かせません。冠婚葬祭は地区単位で行うのが慣習であり、仕事も暮らしも行事も地域みんなと一緒に行っていました。農業従事者が多い小塚原南地区も昔から仲間意識が強いため、比較的苦勞せずに町内会コミュニティの再生ができたのではないかと思います。

しかし、この地区に家を再建し戻ってきたのは震災前の半分に満たない28世帯で、新たに移住してきた人はいません。人口が少なく高齢化率も高いため、この先のコミュニティの継続が課題です。地区の人口を増やし集落を維持するためにも若い世代の移住を期待したいところですが、地域の安全性が確保できない限り、新たに移り住む人はいないのではないのでしょうか。地区の指定避難場所は仙台東部道路となっていますが、そことは別にもっと身近な場所に一次避難所を整備するなど、人の命と暮らしを守る防災面・治安面の強化が必要だと思います。コミュニティは人がいなくては成り立ちません。移住者はもちろん、小塚原地区での農業の新規参入もぜひ受け入れていきたいです。

住民主導で実現した集団移転

私

は、平成19(2007)年から北釜町内会に携わってきました。発災時は、町内会役員として近隣住民に避難を呼びかけながら集会所へ、その後、北釜町内会の一次避難所となっていた仙台空港へ避難者対応のため1人で向かいました。到着直後に津波が押し寄せ、3日間ほど空港内に足止めされました。空港で過ごすなか、この状況では元いた場所に住み続けたい人もいれば戻りたくないという人も出てくるだろう、町内会内での意見調整が必要になってくると考えていました。

その後、第二中学校体育館へ移動し、集会所等に避難していた人たちと合流。そこで私は避難所運営に当たりました。不自由を強いられる避難所では、どうしてもみんなの気が立ってしまうものです。朝と夕方

にミーティングを行って要望の聴取や情報共有をしたり、班分けをして支援物資の配給や清掃を当番制で行うといったルールづくりをしたりとトラブルを最小限に食い止める工夫をしました。それでも悪くなっていく雰囲気、一刻も早く安定した住環境を整えなければいけないという思いが強まりました。震災から約1か月後に住民を集め、町内会総会を開催して集団移転を決

INTERVIEW
6

小塚原南町内会・会長

小平 敏さん

田 畑が広がる小塚原南地区は、面積の割に人口が少なく、震災前の世帯数は六十数世帯ほどでした。津波によりわが家は2.8mの浸水被害に遭い、近隣の家屋も同様に被災し、それぞれ別々の場所にある仮設住宅やみなし仮設住宅に移り住んだため町内会はいったんバラバラになってしまいました。このままコミュニティが失われてしまったら小塚原南町内会は消滅してしまうのではないかと不安がよぎりました。

私たち町内会の住民は避難生活を送りながら小塚原に通い、瓦礫の撤去作業を行いました。農作業ができないことによる収入減を補うためでもありましたが、撤去作業を通してみんなと顔を合わせることでコミュニティの維持を図ることが1番の目的でした。

農業集落は昔からコミュニティ意識が強いと思いま

き合いをしていたことで、暗黙の了解で互いに助け合う関係性ができあがっていたんだと思います。震災時には地区住民はそれぞれ別々の場所に避難したのですが、震災の翌日には自然とみんなが集まり、安否確認や片付けが始まりました。その後の瓦礫処理の仕事も農業再開に向けた準備もみんなで行いました。自分だけじゃなくみんなも同じように苦勞していることがお互いにわかるから、みんなでめげずに頑張ろうという気持ちになれたのだと思います。

震災前、杉ヶ袋地区では子どもみこしが練り歩く夏祭りが盛大に開かれていました。現在、地区内にいる子どもは3人だけになり、残念ながら夏祭りの復活には至っていませんが、昔なじみがみんな戻ってきて町内会は復活しました。長い年月で育まれた地域住民の高い結束力があったから早く立ち直ることができたのだと思います。

東 日本大震災以前の杉ヶ袋北町内会
は約60世帯で構成されていました。そのほとんどが兼業農家で杉ヶ袋北農家組合に所属していました。仕事でも近所付き合いでも普段から顔を合わせることが多く、町内会としての結束力は強かったと思います。震災当時、私は杉ヶ袋北農家組合の役員を務めていました。

発災時、私は仙台市内の会社に勤務しており、自宅へ戻ることができたのは翌朝水が引いた後でした。5年ほど前に新築した自宅は床上1m5cmの浸水、田んぼや畑には瓦礫が散乱していました。作業場や農機具類は流れてしまいましたが、家族は自宅の2階にいて無事でした。避難所となっていた下増田小学校に行き、町内会の人たちと互いの無事を確認し、まだ安否が確認できない人たちを探しにみんなで杉ヶ袋北町内を見て回りました。残念ながら町内で多くの尊い命が犠牲となってしまいました。瓦礫の中から遺体を見つけて運び出し、自衛隊や消防に引き渡しました。避難所生活はしばらく続きました。ただ、避難所にも何もすることがありません。留守を狙った盗難被害なども出始めたため、近所で連れ立って毎日自宅周辺のパトロールをしました。あの当時は、何をするにも町内会の人たちと

INTERVIEW
9

杉ヶ袋北町内会・元会長

森 忠 さん

一緒に行動していたように記憶しています。

その後は町内会で復興組合を組織し、瓦礫処理の活動などをしていました。その頃、みんなの口から出てきたのは「もう農業は続けられない」という言葉でした。畑作は今も続けている人はいます。しかし、稲作は一部を除きほとんどの農家が農業法人に土地を貸して生産を委託するようになりました。ただ、生産を請け負う農業法人もいずれ高齢化の問題が出てくるので、将来的にどうなるかが気になるところです。

杉ヶ袋北は、何代にもわたって住み続けている人が多く、みんなこの土地に愛着を持っています。県道塩釜亘理線から東側が災害危険区域に指定され、町内会の約半数が美田園北へ集団移転してしまいましたが、美田園北から毎日通って農業を続けている人も多くいます。互いの住む場所が離れても、長い年月をかけて育まれた町内会のつながりが断たれることはないと思います。

増したことから、町内会を2つに分けることになりました。移り住んできた人たちの中には子育て世帯も多く、子どもも増えてまち全体に活気が出てきた印象です。しかし、急激に増える新しい住人と顔を合わせる機会がなかなかなく、コミュニティを形づくるのが難しい状況だったため、まずは班単位で懇親会を催すことで隣近所のつながりを醸成していきました。そんな折にやってきたのがコロナ禍です。震災でバラバラになったコミュニティをようやく再生しかけたところで、再び崩れてしまいました。

人口増加に伴い組織立てるはずだった新しい町内会づくりは、震災とコロナ禍で中断し、今度はなり手不足や脱会など新たな問題が出始めています。現在行っている主な町内会活動は年2回のクリーンキャンペーン（清掃活動）ぐらいで、防災訓練などは再開に至っておらず、万が一が起きたときに訓練がないまま果たして動けるのかと懸念を抱かざるを得ません。人口の多さや時代の変化から、かつての飯塚町内会のようなコミュニティ形成は難しいでしょう。これからの町内会づくりを模索しているところです。

人口急増で変化する町内会運営

INTERVIEW
10

飯塚町内会・会長

武田 一弘 さん

東 日本大震災以前の飯塚町内会は約60軒ほどで構成され、地区面積のほとんどが農地でした。町内の高齢化率は高く、小学生や中学生が全くない時期もありましたが、世帯数が少ないのでみんなが顔見知りでコミュニティとしては充実していたと思います。

仙台空港アクセス線の開業に伴い、一帯は区画整理が行われることになりました。土地造成が終わった矢先に震災が発生。過去の経験からこの辺りまでは津波は来ないだろうという認識でいましたが、実際は多くの家や農地が浸水被害に遭いました。同じ町内会の中でも、修繕しながら自宅に住み続けられる人と復興公営住宅に移らなければならない人とで温度差が生じ、それぞれを気遣いながら町内会運営に当たったと記憶しています。

その後、当初の計画どおりに家が建ち始め人口が急